

日本大学へ通う三浦正実は、少し緊張した面持ちで受話器を上げ、就職志望先の会社へ電話を入れた。

「はい、前田商事です」

「私、日本大学の経済学部在籍している三浦正実と申します。恐れ入りますが、人事担当の八木さんをお願いいたします」

「八木はただ今席をはずしておりますが」

「そうですか。何時頃お戻りになりますか？」

「四時には戻る予定になっております」

「それでは、四時頃に改めてお電話いたします。お忙しいところ失礼いたしました」
四時になると、三浦は再び前田商事に電話を入れた。

「はい、前田商事です」

「私、本日午前中にお電話をいたしました、日本大学の三浦正実と申します。人事担当の八木さんはお戻りでしょうか？」

「はい、少々お待ちください」

暫くすると、人事担当者の低い声が受話器から聞こえてきた。

「お待たせしました。八木です」

「あの・・私、日本大学の経済学部在籍している三浦正実と申します。今、お時間は大丈夫でしょうか？」

「はい、構いませんよ」

「私、八月二十一日に行われました会社説明会に参加いたしましたして、御社への就職を希望しております。面接試験はまだ受け付けていらつしやいますか？」

「はい、まだ受け付けています。面接試験は来月の二日、三日、四日の三日間行いますが、二日は既に定員になっていきますので、あとは三日と四日になります」

「では、三日に面接をお願いしたいのですが」

「わかりました。では三日に面接の予定を入れておきます。それでは、あなたの大
学名、学部名、お名前をもう一度お願いします」

「はい、日本大学経済学部の三浦正実と申します」

「日本大学経済学部の三浦正実さんですね。面接は会社説明会の時と同じ、横浜の
本社になります。当日は午前十一時までに、二階奥の会議室の方に来てください。
それから、面接試験を始める前に、一般常識と作文の筆記試験を行う予定になって
います」

「わかりました。それでは、来月三日の午前十一時までに、横浜本社の二階会議室
の方に参りますので、よろしく願います。失礼いたします」

受話器を置くと、三浦は電話口のメモ帳に急いで記入した面接の日時と場所を、
もう一度よく確認し、就職活動記録ノートに書き写した。